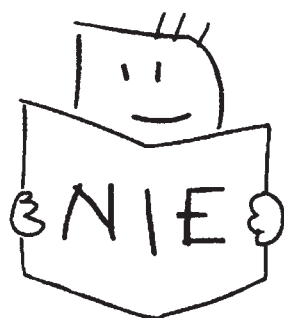


2018（平成30）年度

N I E 実 践 報 告 書



Newspaper in Education

群馬県N I E推進協議会

2018（平成30）年度

N I E 実 践 報 告 書



Newspaper in Education

群馬県N I E推進協議会

Contents

ごあいさつ	群馬県 NIE 推進協議会会長 森 谷 健	
「言語活動に親しみ、自分の考えを表現できる児童の育成」 ー新聞社への投句・意見文の投稿を通してー		
	沼田市立利南東小学校	6
語彙を豊かにし、社会への関心を高める NIE の実践		
	高崎市立新高尾小学校	10
言語能力と実社会への関心を高める NIE		
	太田市立東中学校	14
ものの見方や考え方を深め、思いや考えを伝え合う生徒の育成 ー NIE 1 年目の取り組みを通してー		
	高崎市立大類中学校	18
新聞記事を読み、自分の感想や意見を書いたり、 発表したりできる生徒の育成		
	沼田市立薄根中学校	22
新聞を活用した授業作りの実践		
	桐生市立相生中学校	26
新聞を活用し、世の中をより広い視野で見るための NIE 実践		
	嬭恋村立嬭恋中学校	30
平成 30 年度 NIE 事業への取り組みで生徒が得たもの		
	群馬県立尾瀬高等学校	34
NIE 平成30年度の取組		
	群馬県立伊勢崎高等学校	38



ご あ い さ つ

群馬県NIE推進協議会会長 **森 谷 健**
(群馬大学社会情報学部教授)

群馬県NIE推進協議会では、今年度も活発な事業が展開されました。関係者皆様のご尽力の賜物と、感謝を申し上げます。

2018年度は、実践指定校として、小学校2校、中学校5校、高等学校2校の合計9校で熱心な取り組みをしていただきました。小学校から高等学校まで、それぞれの発達段階に応じて、さまざまな実践が行われました。ご協力いただいた児童・生徒の皆さんと教諭の皆様、ありがとうございました。また、ご協力をいただいた関係新聞各社に御礼を申し上げます。

また、2018年度の「NIE全国大会」は、「新聞と歩む 復興、未来へ」をスローガンに、2018年7月26日、27日の両日にわたり岩手県盛岡市を中心に開催されました。県内からはNIEアドバイザーの先生方4名の方にご参加をいただきました。

さらに、小学校、中学校、高等学校だけではなく、大学や社会教育、企業などで、あらためて新聞を知っていただく機会を多く持つことができました。

これらの詳細については本報告書に掲載されておりますので、ぜひお読みいただければと思います。

いくつものSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）が注目され、他方、教育の中でもタブレットなどのデジタル・デバイスが活用されるようになってきています。今を生きる我々、特に子供たちにとってNIEの意義は再確認されてしかるべきだろうと思われ、本協議会の活動がさらに充実することが期待されるところです。

「言語活動に親しみ、自分の考えを表現できる児童の育成」

－新聞社への投句・意見文の投稿を通して－

沼田市立利南東小学校

林 めぐみ

1 実践の概要

本校は、NIE 実践校として指定を受け2年目の実践を行ってきた。昨年度は高学年中心で行っていた俳句作りを、今年度は全校で定期的に行えるように取組の改善を行った。また、昨年度に続き、国語科で新聞を読んで意見文を書いたり、日常生活の体験をもとに意見文を書いたりして、新聞社に投稿する活動を継続してきた。新聞社への投句・投稿をきっかけとしたこの二本柱による実践を重ね、児童が言語活動に親しみながら自分の考えを表現できる能力を身に付けられるよう指導を行った実践を紹介する。

【主な取組】

- (1) 新聞の閲覧 (第5・6学年 通年実施)
- (2) 上毛俳壇への投句 (全校 通年実施)
- (3) 意見文の投稿 (国語科 単元「意見文を書いて、投稿しよう」 第6学年 6月実施)
- (4) 学習プリント「新聞を読もう」(第5・6学年 通年実施)
- (5) 上毛新聞社編集局編集委員を招いた出前講座「新聞の読み方教室」

2 新聞の置き場と整理の方法

毎日配達していただく新聞は、高学年の教室がある3階で管理を行ってきた。誰でもいつでも新聞の閲覧ができるように廊下の新聞ラックに置かれ、NIE 担当が定期的に新聞の入れ替えを行ってきた。1週間を過ぎた新聞は別室で新聞社毎に保管してきた。



3 実践の内容

(1) 新聞の閲覧 (第5・6学年 通年実施)

本実践でのねらい

世の中の動向を知り情報を得ると共に、言語感覚を豊かにする。

新聞ラックからの閲覧

- ・新聞ラックは高学年の教室前廊下に設置し、1週間分の新聞は上段の棚に置き、子ども新聞はクリップにはさんで下げた。
- ・児童は休み時間に自由に閲覧しており、スポーツ面や子ども新聞の連載記事に関心を持つ児童が楽しみに待っている様子が見られた。

国語科での読む活動

- ・学期末の読書指導で長期保管しておいた上毛新聞の「風っ子新聞」、読売新聞「読売子ども新聞」を使って新聞を読む活動を行った。興味のある記事を夢中で読み、児童間で情報共有する様子が見られた。



(2) 上毛俳壇への投句（全校 定期的に実施）

本実践でのねらい

学力向上の取組の一環として全校で俳句作りに取り組み、児童の豊かな言語感覚を育成する。

全校への周知

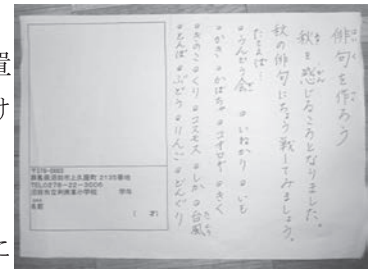
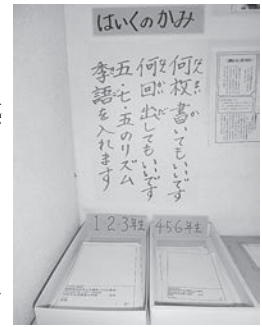
- ・職員会議でNIE担当から各学年へ投句活動を呼びかけ、投句方法を周知した。
- ・季節毎に全児童に俳句作りの用紙を配布し、投句のきっかけ作りをした。テーマや季語を紹介し、俳句を作る意欲を高めたり基礎知識を伝えたりした。

投句用紙の作成・設置

- ・いつでも俳句作りや投句ができるよう学校統一の投句用紙を作成、設置した。用紙は、低学年用と高学年用を作成し、児童の実態に応じて書けるようにした。投句用紙を置く棚を用意し用紙は随時補充していった。

投句作業・掲載作品の掲示

- ・各学年で作った俳句はNIE担当がまとめて上毛新聞社へ送った。たびたび入選作品として掲載され、児童の俳句作りへの関心を高めていた。「ジュニア俳壇18年優秀作品」や「朝の一句」に作品が選ばれると、児童も保護者も学校職員も喜ぶ様子が見られた。掲載された記事は校内3カ所に掲示し、全校に紹介した。



(3) 意見文の投稿

国語科 単元「意見文を書いて、投稿しよう」（第6学年 6月実施 全5時間）

本実践でのねらい

国語科の書く領域において、新聞記事や投稿欄を利用して意見文を作成する指導を行うことで、文章全体の構成の効果を考え、自分の考えを明確に表現できる児童を育成する。

実践前の児童の実態把握と教材準備

- ・既習事項の確認（文章構成の型とその構成要素、意見文作成の活動経験等）を行った。
- ・上毛新聞読者投稿欄「みんなのひろば」から、授業で扱う意見文の記事を選定した。
- ・上毛新聞地域面を数日分用意し、児童の人数分コピーをした。
- ・上毛新聞読者投稿欄「みんなのひろば」への投稿方法を確認した。

第1時

①ねらいー意見文には基本となる三つの文章構成の型があることを理解する。

②児童の様子

- ・新聞の読者投稿欄について知り、意見文を書いて投稿する活動に関心を持つことができた。
- ・投稿された意見文から筆者の主張を読み取ることで文章構成の型の理解ができた。



第2時

①ねらいー主張や事例の述べ方と関わらせながら文章構成の効果を考える。

②児童の様子

- ・それぞれの文章構成の型が持つ効果を、投稿された意見文を基にして考えることができた。
- ・事例の内容として、自分の体験以外にも他の人の体験や引用、考察があることを知った。
- ・地域面数日分の記事を読み、興味を持った内容に自分の考えや意見を持つことができた。

第3時

①ねらいー理由を持って意見文を書くための文章全体の構成を考える。文章構成を意識して構成

メモを書く。

②児童の様子

- ・多くの児童が双括型か尾括型の文章構成を選び、構成表を作成していた。なぜその型を選んだか各自理由を持つことができた。

第4時

①ねらいー構成メモを利用して意見文を書く。

②児童の様子

- ・文章構成の型に合わせて段落毎の内容を確認したり、主張を述べる段落を意識したりできた。
- ・第2時を想起し、読み手が主張に納得するように事例を分かりやすく述べたり、具体的な自分の体験を書くことを心掛けたりできた。

第5時

①ねらいー友達の意見文を読んで、文章構成を捉える。

②児童の様子

- ・友達の書いた意見文を読んで、主張を捉えて文章構成の型を判別したり、事例と主張の関わりを考える発言をしたりできた。
- ・同じ新聞記事を元にしても、一人一人意見や考えが違うことに気付けた児童がいた。
- ・新聞社への投稿の方法について知り、いつでも投稿できるよさを理解できた。

実践後

- ・新聞社へ投稿ー誤字脱字の確認と訂正後、郵便で投稿した。
- ・掲載された意見文の紹介ー授業で5・6年生に紹介するとともに該当児童の家庭へ周知を行った。校内には掲載された意見文を掲示し、全校に周知した。
- ・新たな意見文の投稿活動ー週末に新聞を読む活動「新聞を読もう」（実践の内容(4)参照）を行い、記事の内容について自分の考えを書かせた。児童に原稿用紙を渡し投稿活動を行った。
- ・本単元の投稿や事後の投稿により、多くの児童の意見文が新聞に掲載され、児童や保護者の喜ぶ様子が見られた。

(4) 学習プリント「新聞を読もう」(第5・6学年 通年実施)

本実践でのねらい

新聞を読んで広く世の中のことを知ると共に言語に親しみ、自分の考えをもち表現できる児童を育成する。

児童の実態把握と事前の準備

- ・29年度4月実施の全国学力・学習状況調査の「新聞を読んでいますか。」という質問では、本校の多くの児童が「ほとんど、または、全く読まない」と回答していた。30年度は「週に1～3回程度読んでいる」と答えた児童が3割を超え、全国比を大きく上回っていた。昨年度の取組により、新聞を定期的に読んでいる実感を得ている児童が増えたことが分かった。
- ・新聞記事から児童が興味を持ちそうな記事を選び、記事の内容を読み取る設問を考え、学習プリント「新聞を読もう」を作成した。設問の最後には、児童が記事を読んでもどのようなことに関心を持ち、どんな考えや意見を持ったか記述させる問いを設定した。

家庭学習として学習プリントの配布及び掲示・投稿活動

- ・週末に新聞記事を読ませて学習プリントに答えさせた。学習プリントは国語の時間に答え合わせをし、自分の考えや意見を発表させた。
- ・児童の学習プリントを廊下に掲示し、様々な考えや意見を紹介した。
- ・各学級で数名に声を掛け、学習プリントに記述したことをもとにして

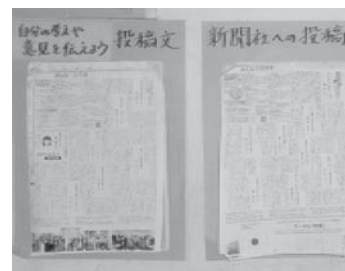


意見文を書かせた。上毛新聞読者投稿欄「みんなのひろば」に投稿し、多くの児童の作品を掲載していただいた。

- 掲載された記事は校内3カ所に掲示し、全校に紹介した。作品が掲載されたことを友達と喜び合ったり、記事を読んで友達の考えを知ったりできた。家庭にも掲載されたことを知らせると保護者も大変喜んでくれた。児童の自己肯定感の高まる様子が見られた。

(5) 上毛新聞社編集局編集委員を招いた出前講座「新聞の読み方教室」

上毛新聞社による出前講座で編集委員の子安悟氏による「新聞の読み方教室」を開催した。5・6年生全員が同じ新聞を手にして新聞記事を読む貴重な体験を行い、新聞の紙面の構成や記者の取材の工夫など教えていただくことができた。子安氏の「新聞1部の文字数は230ページの文庫本1冊に相当する」という話に、子どもたちは改めて新聞は言葉を学ぶ手段として有効であることを実感していた。



4 実践の感想と今後の課題

(1) 児童の変容

- 前項の実態把握からも分かるように NIE 事業に係る取組を2年継続してきたことにより、児童は新聞を読む習慣を身に付けたことが数字で表れてきた。それに伴い、児童が休み時間に新聞の閲覧をしている姿も頻繁に見られるようになった。
- 国語科の文章構成について学ぶ単元で、新聞記事の内容の読み取りとそれに対する自分の考えを持つ学習活動を行ったことにより、自分の主張を相手により分かり易く伝えるための意見文の構成や表現技法等を学び、自分の意見を明確に表現できるようになった。
- 新聞を読んだり意見文を書いたりする活動を通して、語彙を増やして自分の表現に生かそうとする様子が見られた。400～500字程度の文章記述に抵抗感がなくなり、記述量が増え、より具体的に書き表そうと努力する児童が多くなった。
- 俳句作りでは学級担任の協力を得て全校で投句できた。リズムと季語を意識して作る面白さに気付けた児童がいた。新聞に掲載された俳句を校内に掲示すると「だれの俳句ですか？」と寄ってきて読み、「〇〇ちゃん、すごい！」と友達の頑張りを認めていた。



(2) NIE 事業に取り組んで

- 1年目に実践した内容を改善しながら継続してきた2年目だった。全校で取り組む NIE を目指し、今年度は俳句づくりを取り上げたことで、低学年から無理なく投句することができた。国語科での取組では高学年の目標に関わらせながら指導を行い、新聞記事を教材にしたり発展的な学習として新聞社に投稿できたりと学習の幅が広がり、生涯学習につながる指導ができたと感じる。
- 学習プリント「新聞を読もう」は、教科書以外の多様な文章を読ませる経験を与える場となっていた。児童に世の中の出来事を知らせることはもちろん、読書離れの進む子どもたちの読むことへの抵抗をなくしたり、自分の考えを持たせたりすることができた。

(3) 今後の課題

- 新学習指導要領への移行に合わせ、新聞を各教科等でどのように活用できるか事例を参考に本校での指導を模索していく。
- 外部講師を招いた俳句作りの授業を計画し、豊かな言語感覚の育成を図るとともに投句活動を活発にする。

語彙を豊かにし、社会への関心を高めるNIEの実践

高崎市立新高尾小学校

1 実践の概要

本校は、昨年度から NIE 実践校の指定を受け、今年度は2年目の取り組みとなる。昨年度は、校内研修の取り組みである「情報を的確に読み取る工夫」の一環として、新聞を活用して言語能力と論理的思考を育てていくことをねらいとし、第2・5学年を中心に、授業実践を行った。2年目となる今年度は、昨年度の実践を生かしつつ、各学年の発達段階に応じて、新聞を取り入れた授業実践を全学年で進めていくことにした。

低学年では、「新聞に親しむ活動」、中学年では「行事後の新聞作りや学級新聞作りに実際の新聞を活用する活動」、高学年では「新聞記事を活用した情報ノートの学習」を中心として取り組んだ。

また、昨年度から、図書室に新聞コーナーを設けており、今年度は新聞ラックを購入し、児童が自由に新聞に触れ親しむことができるようにしている。来年度からは小学生新聞を定期購読する予定である。



2 実践の様子

(1) 1年生の実践

子ども新聞の1ページを印刷しておき、その中からカタカナと漢字を探す活動を行った。

初めに、カタカナさがしを行った。まずは読むことに集中できるよう、カタカナを探し、赤線を引いていく活動を行った。その後、見つけたカタカナをプリントに正しく書いていくようにさせた。

次に、習った漢字を見つけ、青色の丸で囲む活動を行った。漢字も同様に、プリントに記入する時間を分けて行った。カタカナの時に一度読んでいたため、漢字の方が早く読めている様子であった。漢字については、色々な読み方があるため、読みがなを付けて書けば同じ漢字でもよいものとした。

ほとんどの児童は、見出しを基に、興味のあるところから、記事を読み始めているようであった。児童は、普段あまり新聞を読むことがないため、段の途中にあるカタカナの言葉の一部を見て、「パって何?」と疑問をもつ児童もあり、新聞の構成の仕方について先に簡単に触れるべきであった。

児童は、集中して読み、言葉さがしを楽しんでいた。漢字については、色々な読み方があることを教わってはいるが、その使い方や読み方について実践の中から気付くことが多かったようである。



真剣に新聞を読む児童

(2) 2年生の実践

『新聞を読んでみよう』というテーマで活動を行った。
以下のような新聞の秘密を、実際に新聞を開いて探
してみた。

- ① 開いた時にどんなことが書いてあるか分かる
 - ② 新聞を読んでいて楽しい
 - ③ 新聞は色々な年齢の人が見ることができる
- 以下は児童の学習の振り返りである。

「新聞のよいところを知ったから早起きして読ん
でみようと思った」

「新聞はおもしろいし、料理や工作まであるなんて知らなかった」

「新聞にはいろいろな秘密が隠されていることが分かりました」

「こんなに詳しく書いてあるなんて知りませんでした」

「読み仮名をふると幼稚園生やおじいちゃんお
ばあちゃんまで読めるから楽しいと思った」

「新聞は大切なんだということが分かりました」

上記以外にも活動の中で字を大きくしたり、太
くしている工夫や、絵や写真を入れていることに
気づくことができていた。中学年でのまとめ活動
(学級新聞作成など)に活かすことができるので
はないだろうか。



(3) 3年生の実践

社会科の授業では、校外学習や事前学習で学んだことを新聞にまとめて発表した。事前の
学習では、出てきた疑問をノートにメモし、見学や事後学習で答えを見つけた。事前の学習で
ラスクの作り方や材料を確認しておいたが、実際に工場で話を聞くと教科書には書いていない
材料なども紹介され、児童は手持ちの情報と比較して新しい学びを発見することができた。

今回N I Eの実践を兼ねて、新聞紙を活用しての新聞作りに挑戦した。昨年度の文字探しに
続いて、今年度は見出しと構図に注目する学習だ。授業では見出しと呼ばれる部分を説明し、
見出しの分量や内容がどのようなものか考えた。児童の中からは、「短い言葉だ」「何が書いて
あるか少しわかる」といった意見が出たが、「太字になっている」「しましまなど柄がある」と



いった見た目の工夫に気づく声も挙がった。社会科の
評価項目である「図や表に表して整理する力」にも関
連していた。また、後日、作文の題名を考えるととき
にもこの学習を思い出して書くことができた。新聞紙の
レイアウトも参考に、新聞の名前、発行日、見出し、
編集後記(感想)などを右上から左下に縦書きで書い
ていくことができた。教科横断的な指導ができ、児童

たちに説明する際にも新聞紙が有効となった。

（４）４年生の実践

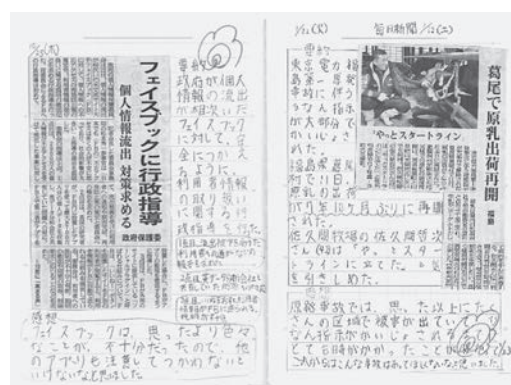
国語「学級新聞を作ろう」では、図書・給食・保健について取材をし、グループごとに学級新聞を作るという活動を行った。まず、実際の新聞を見て、「見出し」「トップ記事」「写真」「図」の使われ方や割り付けについて考えた。そのことによって、工夫した見出しを付けることや、記事に合わせた写真があるとよいことに気付くことができた。各自工夫した新聞を作成することができたが、記事の内容を精選することについては、課題が残った。新聞の割り付けを学んだ後、どんな記事をトップ記事にするかグループでの話し合いを深めてから取材をする、よりよい新聞ができたと考える。

（５）５年生の実践

①新聞を活用した情報ノート

国語の授業で学習した新聞を活用した情報ノートの作成を、週末の宿題や長期休業での課題、自主勉強などを通し継続して実施した。

情報ノートは、教師が児童の興味のあるような新聞記事をピックアップして配付し、児童がその中から、さらに自分で興味のある記事を選び、情報ノートに「記事の要約」と「感想」を書いて作成した。継続するうちに、徐々に記事の内容をまとめるだけでなく記事の大事な文にアンダーラインやコメントを書き足すなど工夫して仕上げる児童が見られた。



②新聞の掲示

５学年の廊下に、「新聞コーナー」を設置した。２、３紙を机上に並べ、自由に見たり、切り抜いたり、掲示したりすることができる。学年後半には、情報ノートで取り上げる記事を見つけようと、進んで新聞を広げる児童が多く見られるようになった。また、戦争や北方領土についてなど、授業で学んだ内容やタイムリーな記事の切抜きを進んで掲示する児童も出てきた。新しい情報に触れさせるとともに、授業で学んだ内容を深めることができた。



（６）６年生の実践

１年を通して「国語」「社会」「理科」「保健体育」「道徳」等で、「情報ノート」を取り入れた学習を行った。情報ノートは、新聞を活用した学習ノートで、教師が抜粋した新聞記事をもとに、その記事の内容について、記事を要約したり、幾つかの設問に解答し、自分の考えを書

いたりしたものである。また、5年時より、家庭学習として、関心のある新聞記事の切り抜きをノートの左ページに貼り付け、記事の内容についての感想や自分の意見を右ページに書かせてきた。書く力、表現する力を育てるとともに、様々な社会の動きを広い視野で見つめ、自分なりの意見を持つことに、大いに役立っていると考えている。

上記の活動を通して、児童は文章を書く力が身についた。与えられた課題に対し、自分の考えを短い時間で文章に表すことができるようになった。またその内容は、的確に要点を射えたり、細かい部分まで書くことができたりするようになった。

さらに、今まで作文を書く際に、何を書いたら良いか分からず、鉛筆を自ら進められなかった子が、想定していた学習時間内に文章を書き上げることができるようになった。また、文章嫌いだった子が多く見られたが、その様な児童も新聞による学習を通して、比較的抵抗なく、長文の設問や課題に対して取り組めるようになった。



また、教室前の廊下に新聞記事を貼り、児童がいつでも読めるようにしている。小学生新聞も含めて7紙を自由に閲覧できるようにしている。授業に関わりのある記事や、タイムリーな記事の切り抜きを掲示して、新しい情報に触れさせるとともに、授業で学んだ内容を深める一助としている。

以上のようなポジティブな面が考えられ、新聞を活用した学習は非常に有効であると考えられる。一方で、扱う内容が『生もの』であるため、新鮮な情報を活用するとなると、教材を保管しておくことはできず、準備に時間を要することが考えられる。頻繁に実施することは難しいかもしれないが、定期的に活用していくことで児童の力を高めていくことが望ましいと考える。

3 実践の感想と今後の課題

- 情報ノートの作成を通し、文章を読み取る力、特に要旨をつかむ力を養うことができた。
- 情報ノートに分かりやすくまとめようとすることで、表現する力も向上した。
- 時事問題への関心を高めることもでき、新聞が役立つことを実感させることもできた。
- 新聞を読むことで、ニュースを身近に感じ話題が豊富になった。
- 書くこと、読むことに対する抵抗感が減ってきている。
- 国語だけでなく、多くの教科に渡って新聞を活用することができた。

- 低、中学年では、「小学生新聞」など、小学生でも読みやすかったり、興味深かったりする記事が載っているものが用意できると良い。

言語能力と実社会への関心を高めるNIE

太田市立東中学校

1 実践の概要

本校は、太田市の中心部に位置し、各学年4学級で全校生徒は420人の中規模の学校である。きちんとした挨拶や清掃、積極的な部活動とともに、学力向上を大きな柱として教育活動を行っているが、生徒の学習意欲をいかに高めて主体的な学習へ結びつけるか等、課題は多い。

NIEは2年目となるが、昨年度の成果と課題を生かしつつ、引き続き「言語能力と実社会への関心を高めるNIE」をテーマに設定した。NIEにより生徒の語彙力の向上、読解力と表現力の向上を目指すとともに、実社会への関心を高め、メディアリテラシーや情報活用力の伸長を図ることにした。

具体的には、新聞を身近にして活用しやすい環境作り、国語科における授業実践、新聞委員会による活動を中心に実践を進めることにした。

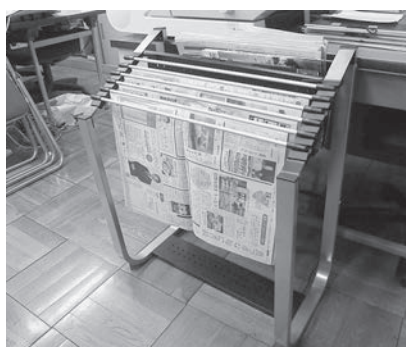
2 新聞の置き場所と整理の方法

本校では、地元の販売店さんのご厚意により、毎朝各クラスに配布できる数の新聞が届く。そこで、クラスに配布する新聞を仕分けて届ける仕事を、「新聞当番」として新聞委員会の生徒に一週間毎の交代で担当してもらっている。そのため、教室内で生徒は自由に新聞を読むことができる環境となっている。

加えて、図書室にも「新聞コーナー」を設け、当日とその前後のあわせて3日分を自由に読めるように新聞を置いている。さらに、4日目の古紙となってしまった新聞を綴じて冊子状にしておき、閲覧棚の上で新聞を広げて読むことができるようにしている。

職員室にも「新聞コーナー」を設置し、新聞ラックに各種新聞を置き、授業に活用できる環境を整えている。

「新聞委員会コーナー」として、1階の生徒玄関の近くに「号外」や週刊「朝日中高生新聞」、毎日新聞社の月刊「なるほどり」、上毛新聞社の「風っこ」「シャトル」、読売新聞社の「読売中高生新聞」を掲示し、全校生徒が気軽に読めるようにした。



職員室の新聞コーナー



図書室の新聞コーナー



毎朝の教室への配布準備

3 実践の内容

(1) 国語科における実践

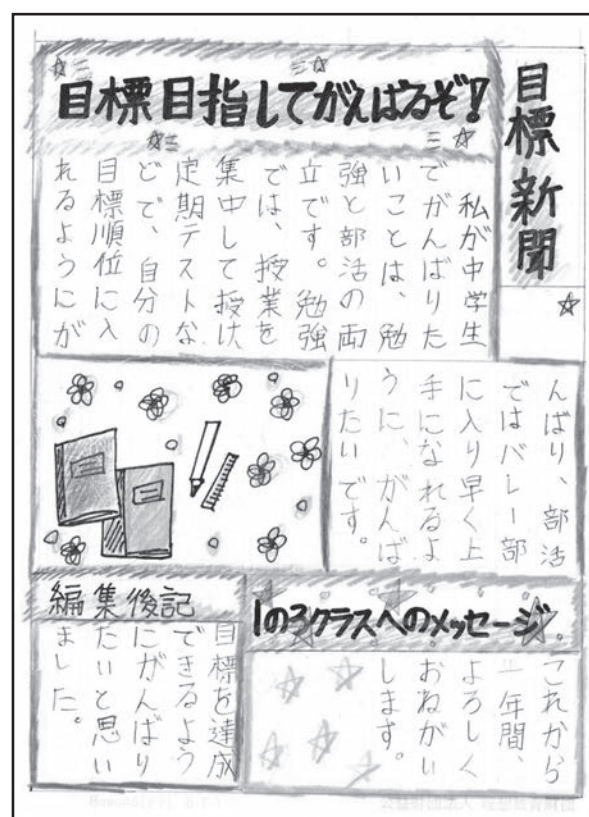
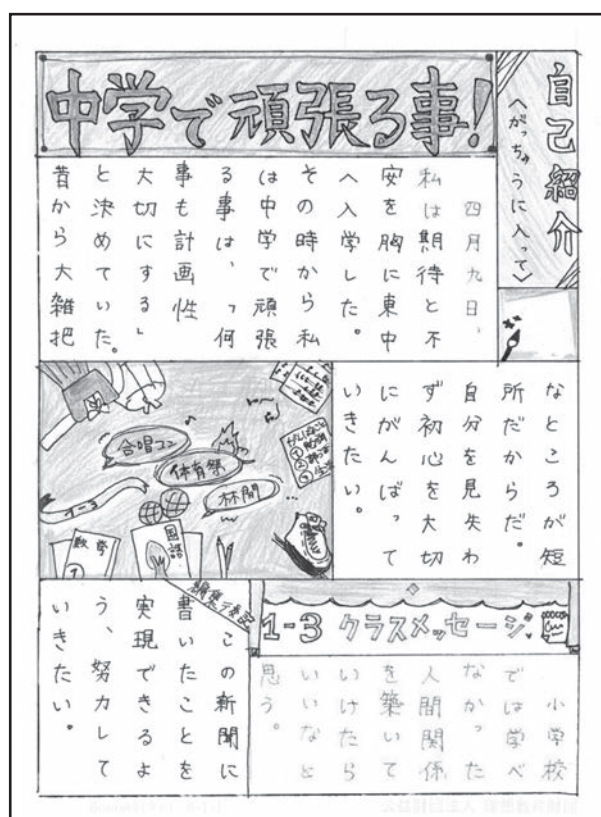
① はがき新聞・自己紹介新聞

国語科における学習新聞づくりは、「読む」「考える」「書く」という言語能力の育成の観点からも大変有効な活動であり、生徒一人ひとりが個性と創造性を発揮しながら、主体的に学習に参加できる活動であるといえる。また、単元や教材のねらいによって、基礎的・基本的な学習内容の充実を図るための補助的学習としても活用できるだけでなく、発展的な学習として学習の幅を広げる活動にすることが可能である。

1年生の国語科では、初めてN I Eに取り組むことになる生徒達なので、まずは手軽に取り組める「はがき新聞」で「自己紹介新聞」を作成し、新聞制作活動の初歩的な技能習得と活動の楽しさを実感できるようにした。

その活動に際しては、語彙の効果的活用を促すため、見出しにどの言葉を使うことが最も適切か考えさせた。また、伝えたい要点は何かしっかりとまとめさせて、読み手の理解を意識して表現力の向上を目指した。

自己紹介新聞で新聞制作に慣れてきたあとは、総合的な学習の時間での新聞制作につなげていく。1学年から3学年まで、林間学校や修学旅行でのまとめとして取り組むなど、国語科での活動が存分に活かされ、学校新聞コンクールでは好成績を収めることができた。



自己紹介新聞作品

② 1 分間ニュースプレゼンテーション

「話すこと・聞くこと」の能力の向上を図るために「1 分間ニュースプレゼンテーション」をクラス内で輪番による活動として取り入れた。これは、世の中の出来事で興味・関心のあることを記事の中から読み、その記事を選んだ理由や感想、伝えたいメッセージを1 分間でプレゼンテーションするというものである。

また、聞いている生徒も視聴記録カードに感想等を記録していく。授業の中で継続的に活動することにより、プレゼンテーション自体への関心だけであった生徒も、徐々に記事の内容にも興味を持つことができるようになり、発表後の意見交換が活発になったり、追加報道を図書室で調べたりと、主体的な活動ができる生徒が増えていった。そして、新聞の持つ魅力を感じることができるようになってきた。

同じように、記事の要点を的確につかみ、短時間で相手に端的に伝えるための練習として、各学級では「最近気になったニュース」をテーマに、帰りの会でスピーチする活動も行っている。

[illegible]

1 分間プレゼンテーション発表側生徒の原稿

[illegible]

視聴側生徒の記録カード

③「いっしょに読もう！新聞コンクール」参加

新聞への関心が持てるようになり、様々な記事の中から自分の興味に沿った記事への欲求が高まり始めたが、長期休業である夏休みに入ってしまう。家庭でも新聞を読み、生徒が主体的に活動できる取組を継続したいと考え日本新聞協会主催の「第9回いっしょに読もう！新聞コンクール」に参加することにした。このコンクールに参加することは、新聞を自分なりに読み取るだけでなく、家族や友達と一緒に調査活動したり、話し合ったりできるという良さがある。しかし、夏休みでの活動になるため、事前指導を十分行う必要があった。

このコンクールには、全国の小中学生や高校生から5万2155点の応募があったが、生徒の積極的な取組により、本校は県内2校の「学校奨励賞」を受賞することができた。さらに、1年生男子生徒が見事「奨励賞」を受賞することができた。

(2) 委員会活動における実践

生徒会活動の新聞委員会では、学級への新聞配布を日常的に行っているだけでなく、「学校のオピニオンリーダーになろう」をスローガンとして、率先して新聞制作ができるように働きかけを行い、各種行事等を機会として学級新聞を制作した。学級新聞は新聞コンクールへの出品を行い、委員会活動が活発に行われるようになっただけでなく、新聞を通して実社会への興味・関心を高まりが新聞委員生徒に感じられるようになった。



新聞委員作成（3年生）



新聞委員作成（1年生）

4 実践の感想及び成果と課題

(1) 生徒の感想

- ・新聞は、時間をかけて読み込むと、短い表現であるが、的確に情報を伝えるような表現がされていて感心する。
- ・インターネットやテレビよりも新聞の方が詳しく書かれているものも多いと感じ、記者のがんばりを感じられる。
- ・新聞のレイアウトを手本になり、自分の伝えたいことが上手に表現できる気がする。
- ・難しい漢字や表現があった時に、自分で調べてみることで言葉や言い方を新しく知ることができた。

(2) 成果

- ① N I Eにより、多くの生徒の新聞に対する興味・関心が高まり、新聞を手にして活用する機会が増えてきた。そして、新聞を授業等で積極的活用することにより、語彙力や表現力が向上したことが生徒の発言や記述により感じられた。
- ② 昨年度は、新聞記者による出前授業を行い、記者の生活や苦労等について直接聞く機会をもてた。生徒はその話を通して新聞や社会に対する興味・関心を高めることができた。

(3) 今後の課題

- ① N I Eを国語科以外の教科でも実践できるようにする必要がある。取り組みやすい活動から少しずつ新聞を活用できるような助言や支援を学校全体で行っていきたい。
- ② 学校での取組のみならず、家庭において積極的な新聞の活用ができるように、P T A組織とも連携を図っていききたい。

ものの見方や考え方を深め、思いや考えを伝え合う生徒の育成 －NIE 1年目の取り組みを通して－

高崎市立大類中学校

1 取り組みの概要

本校は群馬県高崎市の中心部より東側に位置し、交通量の多い環状線に沿った商業地と、住宅地の混在した地域にある。幹線道路から少し離れたところに建つ学校の周りは田園地帯で、すぐ北側には一貫堀川が流れる、のどかな環境にある。恵まれた環境の中、生徒は落ち着いた学校生活を送り、学習にも意欲的に取り組める生徒が多い。

年々新聞を取っている家庭が減り、生徒が新聞に親しむ機会が少なくなっているが、今年度はNIEの指定を受けて新聞7紙をご提供いただけることになり、いろいろな視点で新聞を読み、授業に生かす好機会に恵まれた。今年度は国語科が中心となり、新聞記事を使った授業法の工夫に取り組んできた。また、学活や総合的な学習の時間、学校保健委員会等でも、「新聞」を活用した学習活動をスタートさせている。

本研究を通して、新聞に親しみ、さまざまなものの見方や考え方に触れるとともに、自らの学習や生活に生かす学習活動の工夫に取り組んで行きたい。

2 新聞を置く場と整理の方法

今年度は、地域の販売店より、7紙を9月から12月までの4ヶ月間配達していただいた。

配達された新聞は、図書委員の生徒が「NIE当番」として輪番制で新聞の整理と保管を行い、閲覧場所や保管場所を工夫することで、たくさんの生徒や教職員が気軽に新聞に触れられるようにした。

朝、配達された新聞は、午前中職員室に置き、教職員が空き時間や休憩時間を使って授業に使える記事を探す時間帯とした。その後、昼休みに、NIE当番が職員室から2階玄関前のスペースに新聞を運び、ショーケースの上に平面に並べて置いて7紙を比較して読めるようにした。生徒や教職員がよく通る2階玄関前に並べて置くことで、各紙の一面の取り扱い記事や見出しの違いが視覚的によくわかり、生徒も教職員も気軽に足を止めて新聞に目を通すことができた。(写真①②)

前日の新聞は、当番が玄関スペースから図書室に運び、新聞ラックに7紙を並べ、椅子に座ってゆっくり閲覧できるようにした。この場合は、昼休みにクラスの短学活のスピーチ等で使う記事やコラムを探したり、新聞をじっくり読みたい生徒、ゆっくり新聞を広げる場となるよう設置した。(写真③④参照)

また、図書室では、司書の先生が生徒に読んでもらいたい記事や興味がありそうな記事をピックアップして見開きで置き、いつでも気軽に読めるように配置してくださった。人気のあるアイドルが本を薦めるページや可愛いイラスト入りの受験のアドバイス記事など、生徒に人気のコーナーとなっていた。(写真⑤⑥参照)

3日目以降の新聞は、1階廊下に設置した新聞整理棚に、日付ごとに7紙をまとめ、付箋紙で日付を

明示してストックすることとした。日付ごとにまとめて保存する方法は、必要な記事を探しやすく、過去の記事を授業で使いたいときや記事や見出しを比較する学習の際に便利であった。

写真①② 2階正面玄関前のショーケースに新聞7紙を並べ、各紙一面を比較的に見られるようにした。生徒も職員もたくさん通る場所で、短時間でも気軽に目を通せるよう配置した。



写真③④ショーケース上から図書室に運ばれてきた新聞は、ラックを使って並べている。



写真⑤⑥ 特に読んでもらいたいものや人気のありそうな記事は見開きで掲示している。



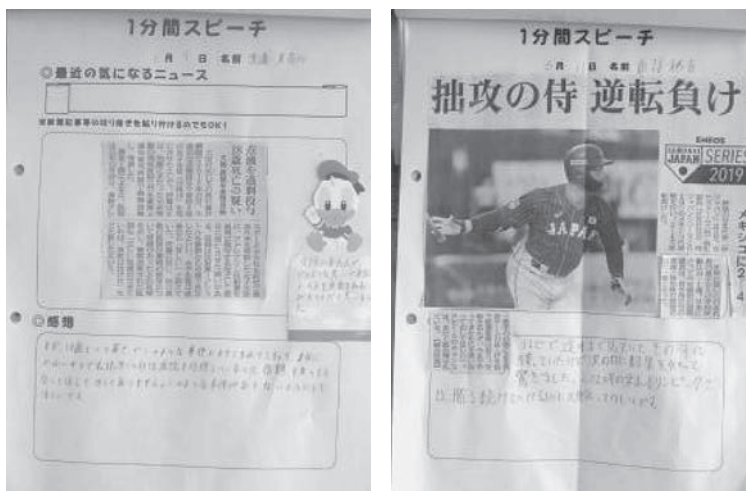
3 実践の内容

(1) 短学活での新聞記事の利用

これまでも短学活等で1分間スピーチを行ってきたが、9月からは新聞記事を読んで、その感想や意見を発表することにした。

日直が、自分の好きなスポーツや社会のできごとについての記事を切り抜き、記事の説明を加えながら、自分の考えをみんなの前で発表した。

スピーチに使った記事は、プリントに貼って感想や意見を記入させ、教室の後ろに掲示して、他の生徒にも読めるようにした。



(2) 国語科「書くこと」の授業での活用

今年度、国語科では、新聞記事に対する意見文を書く学習を行った。

グループ毎にテーマを決めて新聞記事を選び、記事に対する意見文を書いた後、選んだ記事と意見文を模造紙に貼り付けて紙面構成をするという学習に取り組んだ。「まわし読み新聞」の実践を参考にし、「書くこと」に応用した授業を工夫した。

今回、7紙の新聞を利用できたことで、同じ出来事でも、新聞によって見出しや写真、論点が違うことが視覚的にもよく分かり、記事の内容を読み比べることで色々な考えに触れる学習とすることができた。

また、紙面構成の学習場面では、みんなの意見文や選んだ記事の内容にふさわしい見出しをつけるために、グループで話し合いを行い、互いに考えを出し合い、適切な言葉を考える学習に取り組んだ。それぞれの意見文と記事を読み比べながら、キーワードとなる言葉を挙げていき、見出しとしてふさわしい大見出しや小見出しをつくる、活発な活動となった。



それぞれが選んだ新聞記事の内容を紹介し、それに対する意見文を発表した。



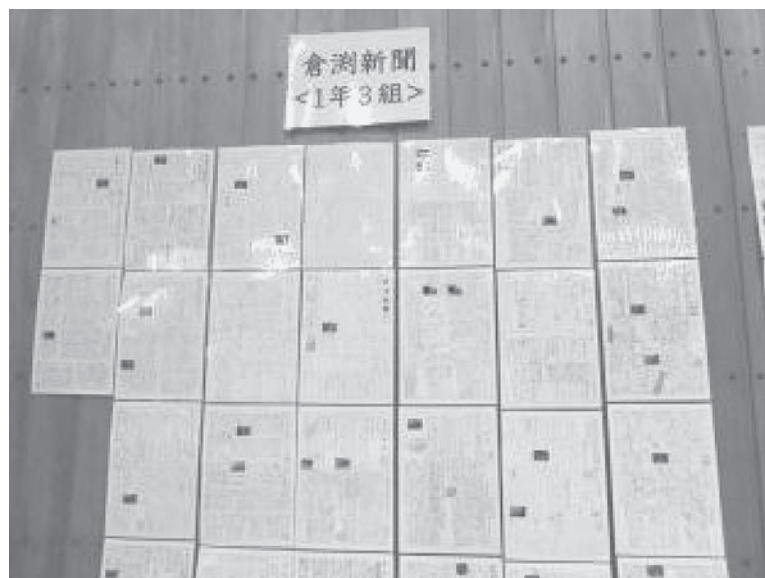
記事と意見文をレイアウトしながら、紙面にふさわしい見出しをつけていく。

(3) 総合的な学習の時間での実践

1 学年では、総合的な学習の時間に、校外学習で学んだことを一人ひとりが新聞形式でまとめる学習活動を行った。

総合的な学習の時間を使い、撮影した写真や手描きのイラストなどを加えながら、それぞれの活動の具体的な内容や感想、活動から学んだことについて B 4 版の用紙にまとめた。

完成した作品は一枚ずつラミネートし、文化祭で体育館壁面に展示した。自分たちが書いた作品がきれいに掲示され、たくさんの生徒や保護者に見ていただけたことは、文章を書くことに苦手感をもつ生徒にも励みになり、書くことへのよい意欲づけとすることができた。



4 実践の感想と今後の課題

N I E の指定を受けて 1 年目の今年は、いかにたくさんの生徒や教職員に新聞を読んでもらうか、授業や生徒の活動に新聞を有効利用してもらうかに苦心した。N I E がどんな活動なのかを周知し、忙しい中学校生活の中で、少しでも新聞に興味をもち、読んでもらえるかを考えた結果、玄関前のショーケースの上に平面的に並べて置く方法を考えた。ちょっとした隙間の時間や、廊下を通った際などに見出しだけでも見てもらいたいと考えた結果の工夫であったが、教室移動や休み時間のわずかな時間で負担なく目を留めてもらえる有効な手立てであったと思う。何より、同時期に 7 紙を配達していただき、読み比べられたことは、たいへん貴重な学習の機会であった。

また、スピーチや国語科の授業などで新聞を活用する授業では、新聞をじっくり読ませ、記事を見つけさせる時間が必要であるため、新聞を読み、記事を見つける時間を設定することが必要であった。普段、新聞を広げて読む機会が少ない生徒にとっては、たくさんの情報が網羅されている新聞を読むのに手間取り、苦勞している様子がうかがえたが、どの生徒も静かに集中して読み、それぞれが興味のある記事やグループ学習のテーマに沿った記事を見つけることができた。さらに、「意見文を書く学習」の場面では、自分の意見や考えを活発に友達と交流させることができ、新聞を授業に活用することの有効性を感じることができた。今年度は、国語科や総合的な学習などでの活用に留まったが、来年度は社会科や理科等の各教科や道徳、キャリア教育等でも、新聞を活用した学習活動の工夫を進めたい。

新聞記事を読み、自分の感想や意見を書いたり、 発表したりできる生徒の育成

沼田市立薄根中学校 教諭 兵藤 泰明

1 実践の概要

本校は、今年度よりN I E実践校として指定を受け、実践を行ってきた。

- (1) 国語科での実践
- (2) 短学活と社会科の時間を活用した実践
- (3) 上毛新聞ひろば欄への投稿



<写真1>

2 新聞の置き場と整理の方法

配送された新聞は、会議室に置き場所を作った。会議室は、生徒玄関すぐ横なので全校生徒が新聞に触れやすいと考え、開放した。会議室のロッカーの上に<写真1>のように積み重ねバスケットを置き、新聞社ごとに整理した。

読み終えた新聞の整理の方法としては、新聞社ごとにまとめて<写真2>のようにロッカーの中に保存していく方法にした。本校で行っている12月のリサイクル活動で古新聞は処理した。



<写真2>

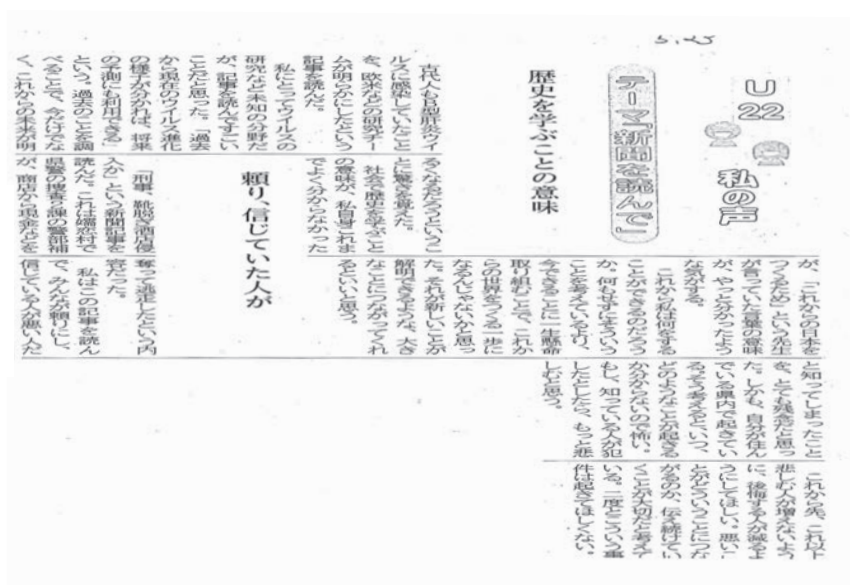
3 実践内容

(1) 国語科での実践

① 主張文を書こう

主張文は、「課題とその背景や意見を述べることになった経緯を明確に書くこと」「課題に対する結論としての自分の意見を明確に書くこと」「自分の意見の根拠を明確に書くこと」「必要に応じて、自分の意見の付帯条件や新たに想定される課題を示していること」「全体の文章構成・段落構成が意見文・主張文の典型的な形式にそっているなど適切であること」などがあげられる。

本単元では、新聞の記事を題材にして、相手の立場や考えを尊重しつつ、自分の考えを深め、主張文を書き、読み合うような活動を行った。読み手を意識した文章を書



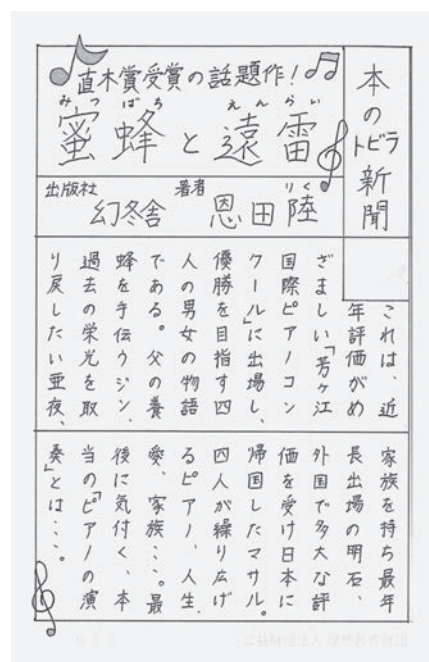
く機会を設けたいと考え仕上げた作品を投稿した。また、新聞に掲載されることにより、書くことに興味や関心をもたせることができたと考えている。

新聞への投稿を勧めることで相手を意識して文章を書くことを繰り返し指導できるよさがあった。

授業展開としては、選んだ新聞記事を基に、意見を考えたり、感じたりしたことをワークシートに書き込む。そして、書き込みをもとに自分の意見や感じたことを数人で話し合う。話し合ったことを基にして投稿用の作文を仕上げ、校正し、新聞社へ投稿をするという手順で行った。

② 読書新聞を作ろう

「目的や意図に応じ、様々な本や文章を読み、内容や要旨を的確にとらえる能力を身に付けさせるとともに、読書を通してものの見方や考え方を広げようとする態度を育てる。」ことを目標に、数名の班での読書新聞の発表を行った。



学習内容	時間	生徒の活動など
- 本時の学習課題を確認する。 - 読書新聞について発表し、分かったことをまとめることを知る。	5分	- 本時のねらいを知る。 - 発表者は、聞き手に分かるように発表し、聞き手はどの発表が良いかを考えながら聞く。
- 読書新聞を発表する。 <話し合いの目的> ○ 順位付けをする。 <具体的な方法> ○ 示された観点で比較する。	30分	3人の班で発表を行う。 「班になって順番に意見を発表しましょう。そして、1名代表者を決めましょう」 - 代表者を1名決める。 - ワークシートを使うが全部記入できなくてもよいので、まずは聞くことを重視するように話す。 9人の班を作り、代表の3人が発表する。 - 発表者の中から1名代表者を決める。 - 代表に選んだ理由を考える。意見が割れた場合は複数名で良いことを決める。 - 推薦者を決め、推薦の言葉を考えさせる。 <評価項目> ◎十分満足な状況 ○おおむね満足な状況 ◎読書新聞を発表する代表者を決めるときに、決めた理由まで発表できる。 ○読書新聞を発表する代表者を決める際に、決めた理由を考えることができる。
全体の前で、推薦者、発表者は発表を行う。	10分	聞いている人に分かりやすく発表をする。聞いている人は、自分の参考になるように聞く。発表を聞いて読ん

＜まとめ方＞	○ 個での集約		でみたいと思ったか？
・ 本時の振り返りをする。 本時の振り返り ・ 友達の発表を聞き、発表の良さを表現できる。 ・ 読書新聞の発表を聞き、読みたい本がある。	5 分	＜振り返りの活動＞ ・ どの本を読みたいと思ったかを書く。 ・ 読書新聞の感想を書いてみる。 ＜予想される生徒の振り返り＞ ・ ～さんの発表の本を読みたいと思った。 ・ 次の発表の時は～さんのようにしてみたい。	

（２）短学活と社会科の時間を活用した実践

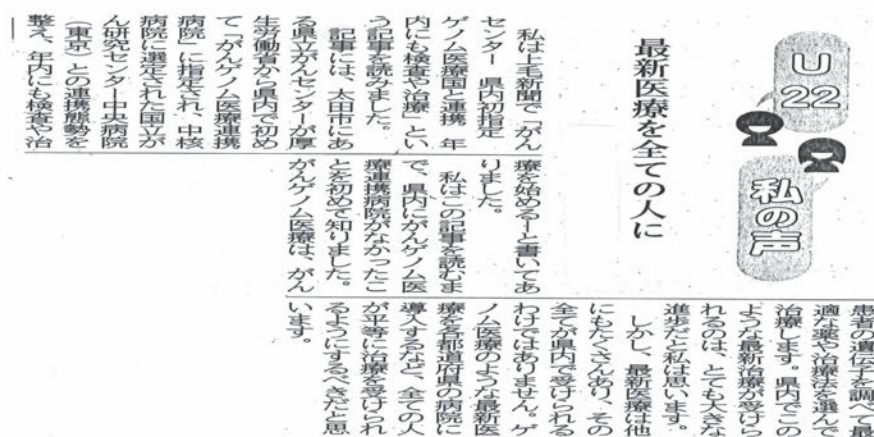
新聞を購読している家庭を本学級で挙手させたところ、およそ半分程度の家庭が購読していたが、残り半分は、日常生活において新聞の存在は知ってはいるが、新聞と関わりが極めて少ない生徒たちが多数いることが分かった。そのような実態を持つ本学級において生徒たちが新聞に親しみ、新聞記事を意欲的に読み進められるようにしたいと願って本実践を行った。具体的には、生徒が複数ある新聞の中から、自分の気に入った記事を探し、その記事について、なぜその記事を選んだのか、またどんな点に共感したのかを記事の紹介とともに、スピーチをする内容である。日常新聞記事に触れていない生徒も多いので、段階を踏んで指導した。

第１段階においては、教師が気になる記事について短学活で生徒の見本となるようなスピーチをしてみせる活動をした。スポーツ選手の活躍など、生徒の興味がある内容から、最先端のがん治療記事や少子高齢化社会について考察した記事など、生徒にとって難しい内容まで多岐にわたった。教師のスピーチを聞きながら、自分たちが紹介する新聞記事を活用したスピーチのイメージ作りを行った。生徒たちは、スピーチのイメージができるとともに、興味深く教師のスピーチを聞いていた。

第２段階においては、主に社会科（公民）の授業の時間を活用して、新聞記事について深く考える時間を設定した。例えば、原子力発電所の再稼働に関連する正反対の内容の新聞記事を紹介しながら、情報ソースである新聞記事を複数見比べながら真実をつかもうとするメディアリテラシーについて考える授業である。生徒たちは、新聞に書かれた内容をそのまま真実と受け止めてしまいがちである。しかし、この実践を通して新聞記事には、新聞社独自の事実を取り上げる視点があることや、視点の違いで正反対に扱われているような場合もあることに気づくことができた。

第３段階においては、実際に新聞を読みながら自分の気になる記事を見つけ、その記事を掘り下げて、スピーチをする取組である。本校会議室に置いてある複数の新聞の中からスピーチで紹介する記事を見つける。そして、その記事に基づいてスピーチ原稿を用意し、短学活で日直当日に発表を行う。

スピーチについては、全員の生徒が意欲的に取り組んでいた。自分が面白いと思っている記事であったり、みんなに知って欲しいと思ったりしている記事であるため、スピーチをする動機の高まりが素晴らしかった。生徒の中には、スピーチ原稿をびっしりと書いてスピーチに臨み、5分近く一人で記事の紹介や記事の考察をスピーチした生徒もいた。また、新



聞記事でスピーチした消費税についての内容がもとで、税の仕組みや役割などの公民科の学習で積極的に発言するなど、今まで以上に意欲的に授業に取り組む姿勢が見えた。

(3) 上毛新聞ひろば欄への投稿

生徒が新聞に関心を持ってもらうために、日々の活動の中で書いた作文を投稿することを考えた。担任と相談し、道德のまとめや振り返りの場面で使うことを提案した。また、読み手を意識した文章を書かせることにもつながると考えて実践を行ってきた。実際に掲載された文章を道德の導入場面で使用したりすることも行った。

<写真は担任が掲載された文章を読み上げている場面>



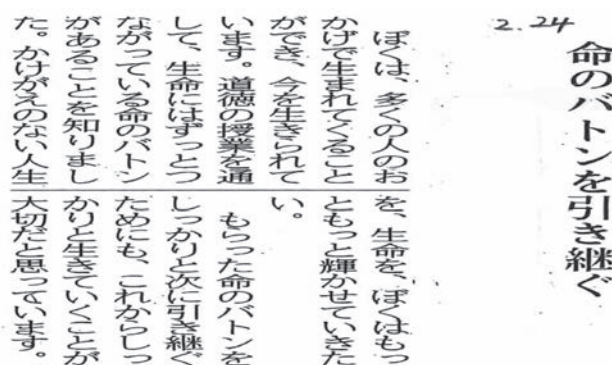
4 実践の感想と今後の課題

<成果>

- ・生徒が新聞に触れる機会を意図的に設定したことにより、複数の新聞を比較した会話が見られるようになった。
- ・生徒が朝、「今日の新聞に載っていたね。」などの会話が聞こえるようになった。
- ・昼休みに会議室で新聞を広げている生徒が見られた。

<課題>

- ・全校で新聞を活用した取り組みを考えていきたい。
- ・委員会の活動などに生徒主体の活動として位置づけていきたい。



新聞を活用した授業作りの実践

桐生市立相生中学校 教諭

小池 正文

1. 実践の概要

本校は、昨年度はN I E実践校として指定を受けたことをきっかけとして、国語科と総合的な学習の時間に新聞を活用しての授業展開を計画した。どちらの教科とも新聞を活用するだけでなく、本校が行ってきた新聞作成につなげるため、学んだこと、考えたことから自らの新聞作成に生かせるようにした。すなわち「新聞から学び、自分の新聞に生かす」というテーマで実践を行ってきた。

今年度の新たな試みとしては、2年生の実践において、普段から行われている朝読書の時間に「新聞週間」を設け、新聞を読み、気になる記事をためていく活動を行った。また、特別支援学級で新聞を活用し、日々の出来事や、社会情勢について学ぶ学習も行った。

新聞のクリッピングが課題であったが、国語科の教員を中心として、指導に活用できそうな記事をクリッピングしていく作業も行った。

2. 実践の内容

○新聞のクリッピング

N I Eの指定校ということで、新聞が毎日数紙送られてくる。それを各教科で使えるようにクリッピングしている。国語科では、クリッピングした新聞記事・コラム・投書欄等を使い、各学年でその記事に対しての意見文を書くという授業を定期的に行っている。本校の生徒の特色として、「自分の意見が書けない」「感想を文に表せない」という生徒が多く、国語部会でもそこが課題となっていた。国語部会を定期的に関き、授業案の話し合いを持つことで、本校の国語指導に共通する改題に対しての解決を図っている。また、保健体育授業では、「自然災害による危険」の単元で、新聞記事を活用して授業を実践し、クリッピングしたものが活用されてきている。

(1) 国語科での取り組み

①本実践は、昨年度引き続き、2年生の「根拠を明確にして意見を書こう」の学習の中に新聞を活用した。本単元では導入で上毛新聞のU 2 2(若者の投書)の中から興味のある投書を選び、自分の主張を設定した。U 2 2は同世代が書いているということもあり、興味を持って読み、それに対する意見を持つことができた。

自分の主張をより明確にするための根拠として、新聞記事の中から具体例や理由付けの基となる記事を探し、それを主張が同じもの同士でグループとなり、それを深めていった。意見文を書く際には「主張」「具体例」「理由付け」「反論やその答」を明確にして文章を書く指導を行った。

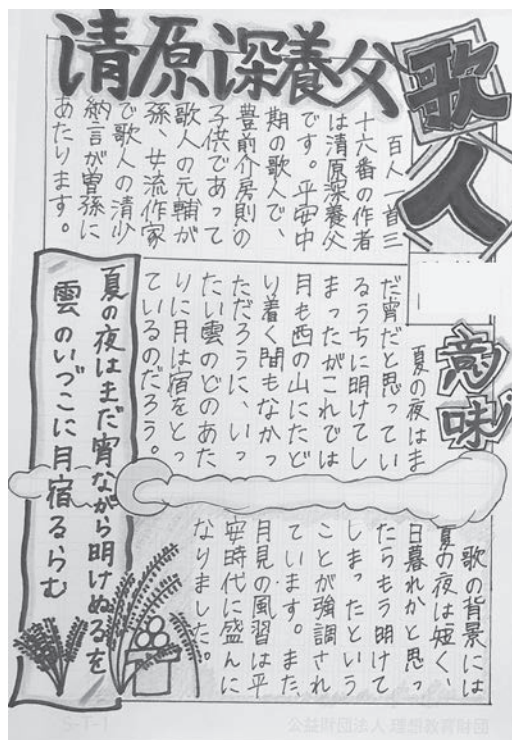
②国語の単元のまとめなどにはがき新聞を使つてのまとめを行った。また、古文を学んだ際には、関連した作品についてまとめたり、「すすめの古典文学」や百人一首から一首を選び、「おすすめの一首」を紹介するのにもはがき新聞を活用した。



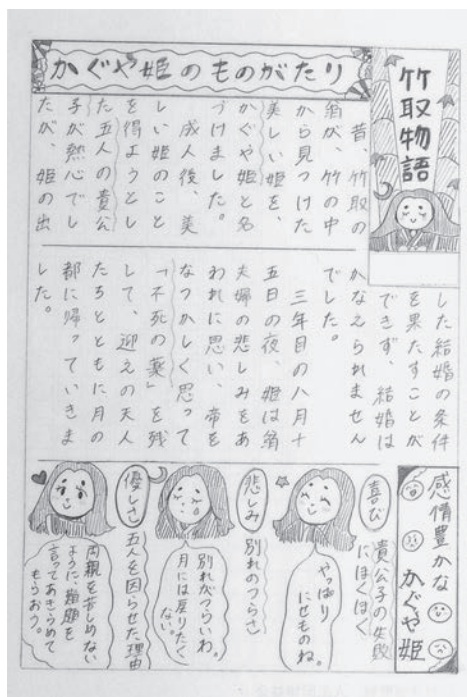
国語科の実践 新聞記事について班別で話し合っている場面



座標軸を用い、投書欄の説得力について発表している場面



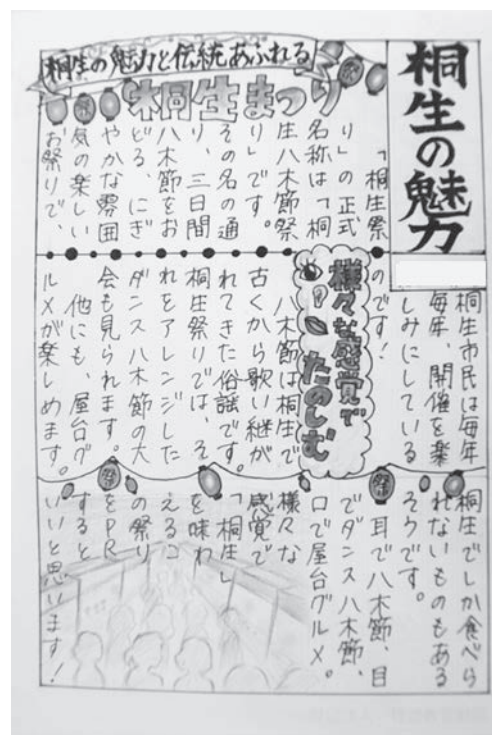
はがき新聞「おすすめの百人一首」



はがき新聞「おすすめの古典文学」

（２）総合的な学習の時間でのN I Eの活用

本校の２年生では「桐生の未来を考える」というテーマで総合的な学習の時間が組まれている。ふろさと桐生を考える際に、学年職員で桐生市に関する新聞記事を探し、その記事をから生徒は桐生の現状を知り、未来の桐生をどうしていきたいか考え、はがき新聞にまとめた。放課後には学年職員（初任者も含む）で模擬授業をしてみたり、桐生に関する写真を持ち寄ったりして、授業準備にあたった。また、まとめのはがき新聞を書く際には、担当として書き方のマニュアルを作成し学年全体での指導法の共通理解を図ったり、各クラスに担当が入ったりして作成の指導を行った。



「桐生の未来を考える」

はがき新聞の実践

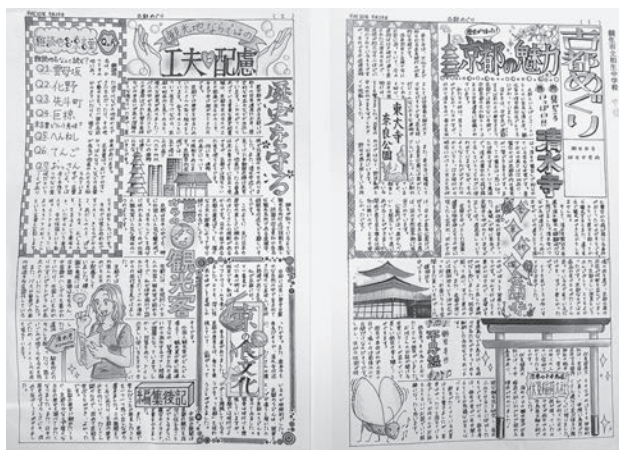
（３）道徳でのN I Eの活用

新聞を活用した道徳の授業の実践を各学年で行った。特に初任者や２年目の教員には新聞を活用した道徳の実践例（指導案・ワークシート）を示したり、一緒に教材研究をしたりしたので、新聞を活用した道徳の授業に取り組みやすかったという意見をもらった。また、授業後には、指導案やワークシートについての意見交流を行い、新聞を用いた道徳の授業の改善に努めた。

(4) 新聞コンクールへの応募

本校では毎年新聞コンクールへの応募を行っているが、広報委員会担当教員を中心として、学級新聞のコンクール入賞を目指し、協力して生徒の指導にあたった。生徒が書いた新聞について放課後に意見を出し合い、よりよい作品になるように相談した。そこから生徒の新聞作成への技術力も向上していった。

また、1年生は「高原学校新聞」、2年生は「職場体験学習新聞」、3年生は「修学旅行」新聞を国語科や総合的な学習の時間を中心として取り組み、学習新聞コンクールへの出品を行った。



修学旅行新聞



学級新聞

3. 実践の成果と課題

【成果】

- 新聞を購読している生徒が少ないため、新聞を活用した授業を行うときに、生徒は興味を持って授業に取り組んでいた。
- 新聞記事を活用することで、語彙に触れる機会が増えた。また、そこに使われている言葉の中で、わからない言葉を調べたり、興味を持って使ってみたりすることで語彙に対して興味を持つ生徒が増えた。
- 同世代の投書欄を活用することで、生徒にとって身近な記事が多く、問題意識を持ちやすく、興味深く授業に取り組むことができた。
- 投書欄を用いたことで意見文の書き方や、根拠の示し方の例にたくさん触れることができた。
- 新聞週間を設けたことで、生徒が新聞に触れる機会が多くなった。
- はがき新聞を活用することで、新聞の書き方に慣れ、抵抗なく書けるようになってきた。

【課題】

- 新聞の置き場所が定まらず、生徒や職員にうまく活用してもらうことができなかった。担当以外でも積極的に活用できるように、保管方法を考えて行かなければならない。
- 新聞のクリッピングを国語科の教員だけで行ったので、効率よく行うことができなかった。
- 学校全体で積極的にNIEに取り組めるように計画の見直しを行っていきたい。

新聞を活用し、世の中をより広い視野で見るためのNIE実践

婦恋村立婦恋中学校

根岸 史直

山越 竜輔

三田恵里奈

田中 彰悟

1 実践の概要

本校は今年度より NIE 実践校として指定を受け、「新聞を活用し、世の中をより広い視野で見るための NIE 実践」をテーマとし、主に国語科と社会科の授業で実践を行ってきた。実践を通して、新聞への関心を高め、情報化する社会の中で実生活や世の中を多面的・多角的にとらえる力の育成を目指した。

実践を行ったのは、主に 2・3 学年の社会の授業と 1・2 学年の国語の授業である。9 月から 12 月には図書委員会の管理のもと、7 社の朝刊が読めるように NIE コーナーを設置し、授業以外でも生徒が新聞に親しみをもてるようにした。

2 実践の内容

第 1 学年 国語科における実践「新聞に親しもう」

1 学年では、まずは新聞に親しめるようにしたいと考え、上毛新聞社の子安記者に来校していただき、出前授業をしていただいた。

授業は 2 時間連続で行い、日本が世界でも有数の新聞大国であること、新聞の作り方、新聞の歴史、新聞の長所と短所、新聞の読み方、ネットニュースを活用する注意点など、新聞について幅広く話していただいた。

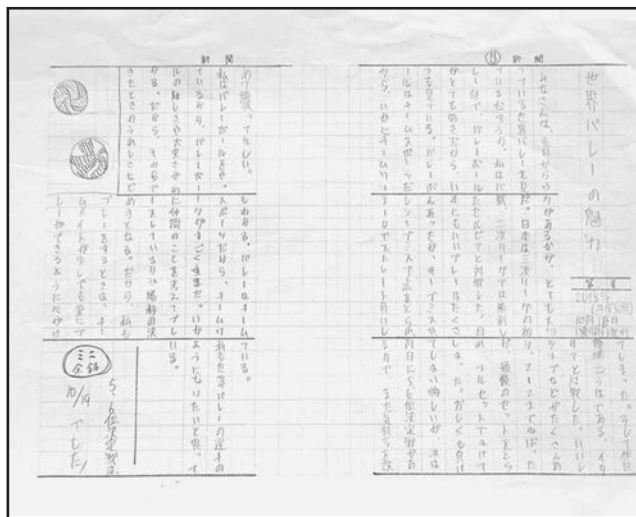
新聞を活用していく上で特に大事な点として、

- ・ネット社会の長所、短所を理解し、賢く活用していく。
- ・ネットニュースは積極的に活用していい。
- ・でも、「情報の信憑性を見分ける力」が必要である。
- ・「書いてあることを何でも信じない」。
- ・「情報」はとても大事なものであるため、意識して新聞を読んでほしい。

ということをメッセージとして話していただき、生徒も納得していた様子だった。新聞の見方を学ぶ場面では、実際に一人一人新聞を手にとって眺めた。どの生徒も真剣に新聞記事を目で追っていた。



そして、後日新聞の形式に従って、「新聞のコラムを書こう」という授業を行った。出前授業で学んだことを生かし、新聞に見出しをつけたり読みやすいよう工夫をしたりしながらコラムを完成させた。



第2学年 国語科における実践「多様な視点から ～メディアと上手につきあうために～」

2 学年の国語では、新聞記事に対して意見を書き、友達と意見を交流して考えを深める実践を行った。

まず、個人で新聞の記事を一つ選び、その記事についての自分の意見を考えた。その後、ペアを作り、選んだ記事と自分の意見を相手に読んでもらい、意見を交流した。友達の意見を受けて、最後には改めて自分の意見をまとめた。

単元の導入では、新聞（テレビ番組欄・スポーツ紙面を除く）を日常的に読んではいないという生徒が非常に多いことが分かった。自分で新聞記事を選択したり、記事についての意見をまとめたりする中で、見出しや図表などの工夫に注目する生徒もいた。また、友達と意見进行交流する中で、「1 つの内容でも新聞によって書かれていることが違う」と、他社の新聞を比べたときの違いについて気付くことができた生徒もいた。

新聞を読んでみようという気持ちになったと答えた生徒もいて、現実には校舎内の談話ホールに置かれた新聞を休み時間に見る生徒が増えた。

第3学年 社会科における実践「複数の新聞から世論を知る」

授業では、「同日・同ニュースを各新聞社はどのように報道しているか」というテーマで行った。

公民学習の基本となる「対立と合意」「効率と公正」などの現代社会をとらえる見方や考え方を各生徒へ確実に身に付けさせるため、「選挙権が18歳から」や「自民党総裁選」など生徒にとって身近な旬の新聞記事を取り上げた。その中でグループやペアで資料を読み取ったり自分で考えたりしたことを話し合わせた。



新聞をモニターに映しての授業の様子



ペア学習での新聞比較の様子



複数社の新聞比較の様子

さらに、マスメディアの世論形成への影響力とメディアリテラシーの重要性について理解させるため、新聞記事の情報を読み取る際に、複数の新聞記事の構成や内容を比較し、気づいたことや考えたことをまとめ、発表し合った。

世論形成におけるマスメディアの役割を理解し、公正な世論形成のためにマスメディアや国民一人一人はどうあるべきか考えることができた。新聞記事の読み取りや比較を通して、メディアリテラシーを身につけることができたであろう。

～授業に使用した新聞社～

上毛新聞社	朝日新聞社	毎日新聞社
読売新聞社	産経新聞社	東京新聞社
日本経済新聞社		計7社

第2学年 社会科における実践「日清・日露戦争と近代産業 ～日露戦争開戦に反対？賛成？～」

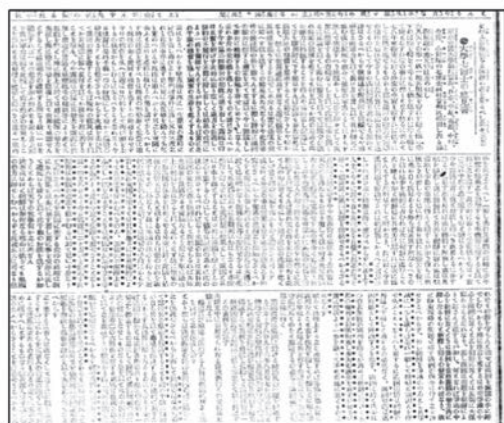
2学年の社会科では、歴史分野の日露戦争期の学習で、新聞を取り入れた実践を行った。日露戦争前後の社会や歴史の流れを学習した上で、まず、当時の新聞記事の比較を行った。1904年の日露戦争開戦前夜の東京朝日新聞の「七博士意見書」、万朝報の内村鑑三による「戦争廃止論」と幸徳秋水の「退社の辞」の新聞記事のコピーを配布し、知っている言葉を探させたところ、「内村鑑三」、「反戦」、「朝鮮」、「満州」といった言葉を見つける生徒がいた。当時の文言で書かれているため、簡単に現代語訳したものを紹介したあと、「日本はロシアと戦うべきか否か」というテーマのもと、自分の意見をまとめた。

授業の中心となる活動では、3～4人のグループディスカッション形式で討論し、グループでまとめた意見を全体で共有した。

「戦うべき」という意見では、「ロシアが朝鮮や満州にせまっていて、もし占領されたら日本にとって不利な状況になるから」「日英同盟を組んでいる今しかロシアと戦えるときはない」「この時代では、戦争を避けていては強くなれない」などの意見がでた。また、「戦うべきでない」とする意見は、「犠牲者

を出してまで朝鮮や満州を欲しいと思わない」「戦争は国民の負担が増える」「人を殺めることは大罪だから」などの意見が出た。各グループの意見には新聞資料から読み取れる内容が大きく反映されている。

3つの新聞記事を比較することで、当時の戦争に対する日本人の考え方に直接触れて読み取ることができた。また、当時、新聞は国民が政治的・国際的情報を得ることのできる貴重なメディアであったという生徒の気づきが得られた。



東京朝日新聞 1903年6月24日「七博士意見書」



万朝報 1903年6月30日「退社の辞」

3 実践の成果と課題

○成果

- ・生徒が学校にいる間、新聞に親しむ機会を増やすことができた。
- ・国語と社会のどちらの教科の授業でも、複数の新聞記事を比較したり、生徒同士で意見を交流したりする活動を通して、個人でもっている考えを広げることができた。
- ・授業実践後に新聞に関心をもち、新聞コーナーの新聞を読む生徒が増えた。
- ・講義を聞いたことをもとにコラムを作ったり、新聞記事を読んだ感想や考えを生徒同士で交流する活動をしたりする授業実践が中心であった。そのため、新聞の内容をただ鵜呑みにするだけでなく、読んで後で自分なりの意見をもとうという生徒の意識を高めることができた。

●課題

- ・今年度は国語科と社会科での実践が中心であった。他教科や特別活動、総合の時間等でも新聞を活用した実践を行ってほしい。
- ・新聞の購読が限られているため、年間を通して生徒が新聞に触れられる機会をつくりたい。購読機関以外にも、通信や授業、学活等で新聞を紹介する実践も行っていけるとよい。
- ・生徒個人を見ると、新聞を読もうとする意識が高まった生徒もいたが、学年や学校全体としての意識を高めたい。NIEに関する情報やテーマを職員間で共有して実践していきけるよう研修等で話し合っていきたい。

平成30年度NIE事業への取り組みで生徒が得たもの

群馬県立尾瀬高等学校 教諭 鈴木経之介 関上 未来

1 本校の概要と実践

①概要と実践

本校は、今年でNIE事業は2年契約の2年目となりました。昨年度は、急遽申し込む状態でありました。しかし、今年度は、ねらいである「①新聞を読むことにより文章になれたり、人の考え方や世の中やニュースを知る。②新聞の感想を書いたり、まとめたりして、人前で話す。③以上のことから『読む力・考える力・話す力』を育む。」ということが明白でした。

そこで、職員には年度当初の職員会議でNIE通信を発行して周知徹底を図り、協力を求めました。生徒には、5月15日にアンケートを実施して、ニュースの情報源や新聞の読む時間や興味ある記事などについて記入させました。また、1学期中間試験最終日5月23日5・6時間目を利用し、全校生徒に上毛新聞社NIE委員長の子安悟氏に「メディアの歴史」・「新聞の魅力」・「新聞の読み方」・「文書の書き方」などについて、画像や映像を見せながら講演していただきました。さらに、5月29日に生徒向けのNIE通信を発行し、この事業への取り組みに興味を持たせました。

昨年度は、主に社会科(地歴公民科)が中心となり取り組み、授業や長期休業中の課題として実施しました。また、新聞を保管している場所が図書館であるため図書委員会が活動の一環として行いました。

本年度は、社会科(地歴公民科)・国語科・英語科や自然環境科などの教科を始め、LHRや進路指導の一環でも実施しました。



▲アンケートに記入の様子



▲子安悟氏の講演の様子



②アンケートの内容

NIEに関するアンケートを平成30年5月と平成31年2月に全校生徒に行った主な結果です。

(1)アンケート集計

a 自宅(ハートフル)で購入している新聞社名の人数と全体に占める割合

新聞名	読売	朝日	毎日	産経	東京	日経	上毛	未購入	合計
人数	11	4	0	0	1	0	65	77	158
%	7	3	0	0	1	0	41	48	100

b ニュースの情報源の人数と全体に占める割合(複数回答)

情報源	新聞	テレビ	ラジオ	携帯電話	パソコン	家族	友達	合計
人数	19	131	5	100	11	32	22	320
%	12	83	3	63	7	20	14	203

c 新聞を読む人数と割合の5月と2月の比較

	5月	合計数		2月	合計数
人数	15人	158人	人数	22人	156人
%	9%		%	14%	

(2)アンケート結果

- ・新聞購入家庭が全校生徒のほぼ半数であり、新聞を目にしない生徒もいる状態でした。
- ・ニュースの情報源は、テレビや携帯といった便利なものが多く、新聞による生徒は非常に少ないのが気になりました。
- ・1年間を通じて若干ではあるが、読む生徒が増えて良かったと思います。

2 新聞の置き場所と整理の方法

毎朝担当教員が新聞を職員室の談話コーナーに置き、先生方に読んでもらいました。翌朝、学校司書が図書館へ運び、昼休み・放課後に自由に読めるようにしました。各新聞を1週間毎に束にして、どの新聞も読めるようにしました。授業でも図書室を利用したり、教室に新聞を持ち運んで、新聞を読ませたり、感想を書いたり、自分の意見をまとめたりさせました。



▲ 図書館の様子

3 実践の内容

①国語科

(1)国語総合(1年普通科・自然環境科)

少年の主張のテーマを新聞記事から選ぶ

本校では、毎年7月に尾瀬地域の片品村立片品中学校・沼田市立利根中学校・沼田市立多那中学校の3校の各学年の代表者と尾瀬高校1年の各クラス代表者1名が「少年の主張」を行っています。今年度は、その内容を朝日新聞と上毛新聞の中からテーマを選んで発表しました。

【演題】「毎日楽しく過ごすように」と「私の進むべき道」



▲ 少年の主張

(2)国語総合(1年自然環境科)

新聞を見て、興味ある事や気になる事など見つけて作文(意見文)を書かせました。

【学んだこと】 ・テレビのニュースでしか情報を得ていなかったが、新聞はテレビと違いゆっくり自分が理解するまで細かいところまで読めるので良いと思った。
・あまり新聞を読まないで、情報を得ることができた。
・世の中の知らないことがたくさんあり、自分も少しは知っていなければならないと思った。

②社会科(地歴公民科)

・現代社会(1年普通科・3年自然環境科) ・地歴公民科セミナー(3年普通科選択)

最初の授業で「最近気になったニュース」をクラスメイトの前で話させました。互いにニュース内容について、意見を交換し合うなどアクティブラーニングの一環として新聞を役立てた。

【学んだこと】 ・一人一人捉え方や考え方が違うこと。新聞について触れられた。
・自分の生活に関わってくる話題についても知れた。
・いろんなことが書いてあるので楽しい。
・感想をまとめるのが難しかった。

③英語科

・コミュニケーション英語Ⅱ(2年普通科人文科学コース
・自然環境科環境科学コース)

読解練習の一環として、日本の文化に関する英文の記事を読み、英語の設問に答える活動を行いました。習熟度別編成の学年の中では最上位クラスで実践しました。難易度の高い英文でしたが、辞書等を活用して、真面目に取り組んでいました。

【学んだこと】 ・英語が難しい。
・英語がわかれば、もっと楽しくなる。



▲ 授業風景

④商業科

- ・文書基礎(2年自然環境科選択)・電子商取引(3年普通科経情コース)

長期休業中の課題として、政治・経済・ビジネス・国際社会・教育・群馬・スポーツ・芸能の8種類のジャンルについて、生徒に新聞記事をノートに切り貼りをしてもらい、記事についての感想を記入させました。自分なりの意見を持っている生徒、世の中で起きていることを他人事のように捉えている生徒など様々な感想がありました。

- 【学んだこと】
- ・世の中の現状が改めて理解できた。
 - ・新聞の楽しさがわかった。
 - ・色々なジャンルに興味を持てた。
 - ・色々なことが知れた。

⑤自然環境科

- ・環境の保全(学校設定科目)(3年自然環境科自然環境コース)

自然環境を題材としている新聞記事を用意し、分からない単語を調べ、自分の考えをまとめさせました。それをもとにして、級友とディスカッション等を行わせました。他者の考えを知ることにより、自分の考えを深めることができ、活発に意見交換をすることができました。

- 【学んだこと】
- ・いろんなことが書いてある。
 - ・あまり新聞を読まないで、情報を得ることができた。
 - ・日本の情報を知ることができた。

⑥その他活動

- (1) LHR(2年) ・上毛新聞の「ひろば」への投稿

進路指導の一環として、新聞を読ませ、600字程度の感想を書かせました。新聞を読む力と文章を書く力の向上を目指しました。また、時間内で書き終わらない生徒には、宿題にして、全員に書かせました。それを上毛新聞の「U22私の声」へ投稿しました。生徒は、真剣に取り組んでいました。

- 【学んだこと】
- ・新聞を読んで少しでもどんなことが起きているのかがわかること。
 - ・狭いようだけど日本は広いと感じた。知らない話題がいくつかあり、知識を増やすことができた。
 - ・世の中で起きている様々なニュースを知ることができた。

- (2) 進路指導(2年希望者)

毎週1回、様々なジャンルの記事を希望する生徒に配布しました。分からない単語を調べ、自分の意見や感想をまとめさせました。大学の推薦入試等で課せられる小論文対策の一つとして生徒の力になったと思います。今後も継続して行い、添削をして返却していきたくと思います。

- 【学んだこと】
- ・語彙や考えの幅が広がった。
 - ・文章作りと小論文の練習になった。
 - ・小論文などで必要なことが考えられるようになった。
 - ・要点をつかめるようになった。



▲ 新聞ノート

- (3) 上毛新聞の「ひろば」に掲載された記事を連携中でも活用

「U22私の声」に掲載された記事のうち、連携中の出身中学校である沼田市立利根中学校と片品村立片品中学校に渡しました。それぞれ社会の時間で利根中学校ではその記事を読んだ感想や意見を出し合いました。また、片品中学校では、新聞作りを行いました。

⑦生徒インタビュー

5月に実施したアンケートでは新聞を読んでいませんでしたが、2月に実施したアンケートでは新聞を読む時間が毎日30分となった2年生女子に実施したインタビュー内容です。

Q1 図書館にある新聞を読みはじめた切っ掛けは何ですか？

下宿生なので新聞を取っていなかったこと、四年制大学への進学を目指しているの知識や読解力を付けたかったし、面接や小論文の対策にもなると思いました。

Q2 どの新聞を読む事が多いですか？

朝日新聞と上毛新聞が多いです。

Q3 理由があればそれも教えてください。

尾瀬高図書館で通年購読してるので長い期間の特集なども読めること、各新聞を読み比べてみて自分に合っていると思いました。それと、司書さんに大学進学を考えているなら、まずは朝日新聞あたりから読んでみたらとアドバイスされました。

Q4 どんな記事に注目して読んでいますか？

トップの見出し記事です、やはりその日の一番重要なニュースなので。

Q5 意識して毎回読んでいる特集などはありますか？

社説です。その新聞社の主張として載せる論説だと教わっているのです。

Q6 好きな記事はありますか？

投稿欄です。若い人を含め、たくさんの人の意見や考え方が知れるからです。

Q7 今までで一番印象に残った記事があれば教えてください。

沖縄へ修学旅行で行ったということもあり、沖縄知事選や米軍基地移転の県民投票などです。

Q8 新聞を読みはじめて何か自分の変化を感じていますか？

それぞれのニュースについて深く知りたくなりました。そして記事の中の難しい言葉を調べる癖がついたので語彙力や読解力も多少付いたのかなと思っています。

Q9 今後とも、新聞を読む習慣を続けていきたいですか？

新聞の楽しさや深く知ることの意義などに気付けたので、これからもずっと読んでいきたいです

Q10 同年代の高校生へメッセージをお願いします？

ページをめくるたびに様々な情報が見られて楽しいし、自分のペースで読めるのがとても良いです。興味がない記事もあると思うけど、自分自身を成長させることが出来るので皆さんもぜひ読んで欲しいです。



▲インタビュー風景

4 実践の感想と今後の課題

①実践の感想

アンケート結果の通り、新聞を読む生徒数が15名から22名の7名増加、割合で9%が14%と5%増えました。少なからず成果はみられたようです。

また、3年生で大学受験をした生徒や2年生で来年度4年制大学進学を考えている生徒は、新聞を読み、感想だけでなく自分なりの意見を書けるようになった生徒もみられるようになりました。

さらに、上毛新聞の「ひろばのU22私の声」に掲載された記事を教室内に掲示したところPTA総会の学級懇談会や二者面談に来校した保護者が熱心に読んでいました。新聞に掲載されたことで連携中の先生方や地元の方やOBの方からも声をかけていただきました。

実践内容の授業で生徒が「学んだこと」から、この活動をやって良かったと心底思いました。

②今後の課題

今年度は2年目でもあり、社会科(地歴公民科)・国語科・英語科や自然環境科などの教科を始め、LHRや進路指導の一環でも実施しました。しかし、未だに実施していない教科もあるので、来年度は全ての教科や先生が実践していただけるように推進していきたいと思います。そして、新聞を読む生徒の割合が増え、ニュースに関心を持ち、今後の地元や日本について考える力を身に付けてくれればと思っています。

NIE 平成30年度の取組

群馬県立伊勢崎高等学校 教諭 森 貴由紀

I. 本校の実践概要

伊勢崎高校はグローバルコミュニケーション科と普通科の2つの学科を持ち、1学年8クラスという県内でも最大規模の生徒数を有する学校である。グローバルコミュニケーション科では、国際社会で活躍できる資質を身に付けた人材育成に力を入れて、ニュージーランドやカナダへの留学プログラムなどを行っている。普通科では難関国公立大学から私立大学まで幅広い進路希望に対応したカリキュラムが組まれ、習熟度別授業や少人数授業など一人一人の実態に合わせた授業が展開されている。

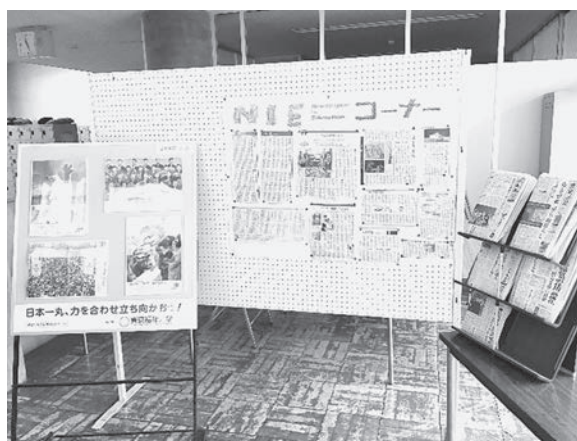
本校卒業生の進路は、概ね大学・短大への進学が7割、専門学校への進学が2割、就職・その他が1割となっている。日頃より新聞を読むことが習慣化している生徒は多くはないが、自分の進路実現に向けて必要に応じて新聞を活用する姿はみられる。



当日の新聞は生徒玄関に設置

II. 新聞の置き場所や活用方法

本校は、今年度よりNIE実践校の指定を受け、地歴・公民の授業を中心に計画的に取り組んでいる。また、学校司書を中心に生徒が興味を引きそうな記事を切り抜き、模造紙に貼り掲示している。切り抜く記事は現代社会で起こっている諸問題をリアルタイムで理解できるようにまとめられている記事を多く示せるよ



司書教諭と協力してNIEコーナーを開設

うに努めている。

毎日届く新聞は2・3年生が使用する玄関近くのスペースにラックを置き、生徒が自由に手に取れるようにした。また、過去の新聞は他教科の教員でも活用できるように新聞社ごとに保管した。実際には国語科や公民科でも授業で活用した。

Ⅲ．実践内容

授業実践は2年生理系クラスである6組～8組（各42人）で行われている「地理B」の時間に実施した。生徒に聞き取り調査をした結果、日常的に家庭で新聞を購読している生徒は半数程度であったことから、じっくりと新聞記事を読む機会は多くないと推測される。理系クラスの生徒は工業系や建築系などのものづくり分野、看護・医療分野を希望している生徒が多い。

NIEの実践を計画する中で生徒の実態を考慮すると、社会面や経済面の内容を中心に自身の将来と関わる記事を見つけ出すことが容易であることや、生徒が早くから志望する分野のトピックスを蓄積することが重要であることが考えられ、「資源と産業」のまとめとして今回の授業内容を選択した。

単元 「地理B」 2章 資源と産業 8節 現代社会の貿易と経済圏
本時の学習 （6／6時間目）

目標 新聞記事を活用し、入試・入社試験の時事的な知識を構築する。
ねらい 世界の資源や産業のまとめとして、自分が興味のある分野または将来進む分野について時事的な知識を構築し、さらに記事に対して自分なりの意見を持つ。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 7分	・日本新聞協会調査データ「新聞・新聞広告に関する基礎データ」を活用し、新聞の現状を知る。 ・本時の学習内容を確認する。	・生徒自身がデータを比較できるような問いかけを行う。 ・入試・入社試験での時事対策についても触れる。	

展開 35 分	・新聞記事を選ぶ。 ・面接の質問内容として「最近の出来事で気になったことを教えてください」または「あなたが学ぶ分野で気になる出来事を教えてください」のどちらかを選ぶ。 ・記事の内容をまとめる。 ・自分の選んだ質問に回答する。 ・生徒同士で3人組を作り、模擬面接を行う。 ・面接官役と評価者役は受験生役の生徒にアドバイスをする。	・生徒が主体的かつ自由に選べるように、1ヶ月分の新聞を社ごとにダンボールに分ける。 ・必要に応じて各社の記事の特徴を説明する。 ・教室内を巡回し、記事の選択に苦労している生徒に対してはアドバイスをを行う。 ・面接の場面を想定して、自分の意見が反映できるように内容をまとめさせる。 ・1分～1分30秒程度で回答できる文章を作成させる。 ・受験生役、面接官役、評価者役を決め、ローテーションで回す。 ・面接官役の生徒に追加質問を2つするように指示する。 ・否定的な意見が多くならないように指示する。	適切な記事を選ぶことができるか。 面接内容の改善のために、生徒同士で活発な意見交換ができているか。
まとめ 8 分	・相手からのアドバイスを朱色でプリントに書き込み、提出する。		



新聞を各自で選択



記事の内容をまとめる

地 理 B

(※外編①)

入試・入社試験では「最近の出来事で気になったことを教えてください」または「あなたが
 学ぶ分野で気になる出来事を教えてください」という質問がよく聞かれる。新聞を1つ選び
 どちらかの質問に回答しよう。

S T E P 1 どちらかの質問に○をしなさい。

A 「最近の出来事で気になったことを教えてください」

B 「あなたが学ぶ(入社する)分野で気になる出来事を教えてください」

S T E P 2 選んだ記事の内容をまとめよう。

見出し _____

内容 _____

S T E P 3 質問に対して回答しよう。面接官にわかりやすく説明するのがポイント。理由
 を含めて30秒くらいの文を作成しよう。

S T E P 4 面接官役の生徒からもらったアドバイスを書き込もう。

組 長 氏 名 _____

授業で活用したプリント

IV. 実践の感想と今後の課題

N I Eの取り組みが初年度ということもあり、手探りでの実践であった。生徒は授業を通して新聞に慣れ親しむ姿が多くみられ、実践を始める前は「なぜネットニュースではダメなのか」「どのようにして新聞を選んだらいいのかわからない」といった意見も聞かれたが、数種類の新聞を活用したことや実践を積み重ねることで生徒自身がこうした疑問も主体的に解決していった。また、活動を自身の将来と絡めることで、活字の重要性を理解しているがなかなかそういう機会を設けられない生徒にとってはいい刺激になったと考えられる。

一方で課題は以下のようにまとめられ、次年度の改善点としたい。

- ・授業での活用が中心であったため、生徒が主体的に新聞を活用するといった場面を多く設定することができなかった。
- ・教職員全体に周知する機会が少なく、活動が一部の教員になってしまった。
- ・実践後に生徒向けのアンケートを実施することができず、生徒側からの課題

を吸い上げることができなかった。

【これまでの実践校】

- ◆2004年度 笠懸中、万場高、創世中等教育、昭和南小、高崎大類小
- ◆2005年度 万場高、創世中等教育、昭和南小、高崎大類小
- ◆2006年度 伊勢崎境剛志小、伊勢崎境西中、太田東中、西邑楽高、富岡高瀬小、高崎寺尾小、前橋新田小、前橋一中
- ◆2007年度 富岡高瀬小、高崎寺尾小、前橋新田小、前橋一中、高崎西部小、太田沢野中央小、太田生品中、沼田小
- ◆2008年度 太田沢野中央小、太田生品中、沼田小、伊勢崎四中、館林二中、太田女子高、尾瀬高、館林高定時制
- ◆2009年度 太田生品中、伊勢崎四中、館林二中、太田女子高、尾瀬高、板倉北小、前橋元総社中、太田高
- ◆2010年度 太田生品中、板倉北小、前橋元総社中、太田高、桐生新里北小、前橋大利根小、伊勢崎殖蓮中、勢多農林高
- ◆2011年度 板倉北小、新里北小、前橋大利根小、伊勢崎殖蓮中、勢多農林高、高崎城東小、太田西中、太田強戸中
- ◆2012年度 前橋原小、高崎片岡小、伊勢崎豊受小、千代田東小、桐生広沢中、太田西中、太田強戸中、館林商工高
- ◆2013年度 前橋原小、伊勢崎豊受小、千代田東小、高崎高松中、桐生広沢中、太田西中、太田強戸中、昭和中、館林商工高、群馬法科ビジネス専門学校、大泉保育福祉専門学校
- ◆2014年度 群馬大附属小、伊勢崎豊受小、高崎高松中、太田西中、沼田南中、昭和中、藤岡中央高、西邑楽高、館林商工高、群馬法科ビジネス専門学校、大泉保育福祉専門学校
- ◆2015年度 群馬大附属小、高崎南小、桐生川内小、太田西中、沼田南中、館林四中、甘楽二中、藤岡中央高、西邑楽高
- ◆2016年度 高崎南小、桐生川内小、昭和東小、館林四中、甘楽中、前橋富士見中、高崎一中、沼田南中、太田西中、西邑楽高
- ◆2017年度 昭和東小、沼田利南東小、高崎新高尾小、桐生相生中、太田東中、前橋富士見中、高崎第一中、沼田沼田南中、尾瀬高
- ◆2018年度 高崎新高尾小、沼田利南東小、太田東中、桐生相生中、高崎大類中、嬬恋中、沼田薄根中、伊勢崎高、尾瀬高

2019年6月30日発行

2018（平成30）年度

群馬県N I E実践報告書

編 集 群馬県N I E推進協議会事務局

発行者 群馬県N I E推進協議会

事務局 〒371-8666 前橋市古市町1-50-21

上毛新聞社内

電話 027-254-9923
